

## 普及啓発小冊子掲載事例について（第3回部会意見反映）

	タイトル	概要	課題	第3章「考えること」との連動キーワード	
事例①	話し合うきっかけが見つからない事例	◆本人 80歳 ◆家族 一人暮らし。子がいるが遠方に在住。配偶者は既に他界。 ア. 軽い脳梗塞を発症。麻痺が残るが自力で生活ができる。 イ. 再度の脳梗塞を起こした場合、更に麻痺が広がり、食事や入浴などが困難になると言われている。	ア. 治療のことは、医者に任せておけばいいと思っている。 イ. 自力で生活ができなくなった場合の居場所について ウ. 話し合うきっかけが見つからない エ. これからの自分の姿（予後）の把握ができていない	まずはここから	これまで大切にしてきたこと、これから大事にしたいこと、財産についてどうしたいか
事例②	これからの生活について話し合いができていない事例	◆本人 40代 女性 会社勤務 ◆家族 夫 ア. 40歳のとき、乳がん（ステージ2）と診断。 イ. 徐々に使用できる抗がん剤がなくなってきているほか、副作用が身体に負担をかけており、治療の継続が難しくなっている。 ウ. 妻は、今回の治療以降は積極的治療を終了し、在宅での緩和ケアのみの治療に移行するか迷っており、治療継続を希望する夫と話し合わなければと考えている。	ア. 治療のつらさ、病状の変化により、本人の考えが何度も揺れ動く。 (体調が落ち着いているときに話し合うのがよい。) イ. ACPはこれまで行っておらず、家族は本人の思いを十分に理解できていない。	まずはここから	これから大事にしたいこと
事例③	認知症の父との話し合いに悩んでいる事例	◆本人 70代 男性 持ち家に一人暮らし ◆家族 娘が近所に居住。 ア. 認知症と診断。自宅での療養を希望。 イ. 現在、食事やトイレ（時々失禁がある。）は概ね自力でできているが、判断力の低下、会話が難しい時間ができている。	ア. 現在の状況で何をどのように話し合えばいいのか悩んでいる イ. 認知症の進行を視野に入れた話し合いをどのように行うのか（代理決定、事前にできるだけ希望を話し合う） ウ. 家族と本人の希望の不一致（自宅か施設か）	まずはここから	これから大事にしたいこと
事例④	本人の希望と適切な医療のすり合わせが難しい事例 ※川崎委員ご提供事例	◆62歳 男性 慢性アルコール性膵炎 ◆妻と二人暮らしで会社を経営 小会社のワンマン敏腕社長 ア. 社長としての打ち合わせで飲酒接待が続くと膵炎が悪化して外来点滴の繰り返し イ. 最近を受診が頻回になり入院を勧められるも仕事を理由に拒否 ウ. このまま飲酒が続けば、急性膵壊死を続発して生命にかかわる	ア. 本人の希望（仕事：会社経営のため飲酒接待は必須）は明確である イ. 急性膵壊死は有症状で致死的であり、その時点で仕事は一切できない ウ. 本人がいないと会社は経営が破綻し、死亡すれば妻が借金を負債する	まずはここから	これまで大事にしてきたこと：会社の経営と借金返済 これから大事にしたいこと：借金返済できたら、療養して長生きしたい
事例⑤	本人の治療について家族間で意見が異なる事例 ※川崎委員ご提供事例	◆64歳 男性 前立腺がん末期 終末期ではなかった ◆アメリカ育ち（50年）で今は日本で一人暮らし 弟が二人（すぐ下の弟はアメリカ在住、一番下の弟は日本在住） ア. 前立腺がん末期ではあるが生活は自立していた イ. 呼吸苦を主訴に自ら救急車を呼んでかかりつけ病院に緊急入院、入院後意識消失 ウ. 脳転移の進行により数時間以内に人工呼吸を要する状態	ア. アメリカ在住の弟は人工呼吸を拒否、日本在住の弟は意識が戻るのであれば望む イ. 日本で記載した公正証書としての尊厳死宣言はある ウ. 死期を伸ばすためだけの延命治療は一切行わないでほしいとの記載あり	まずはここから	延命治療の拒否は明確である 意識が戻る可能性のある治療は本人が希望をしていない延命治療にあたるだろうか 今の状況に対する本人の意思は不明瞭であり、かつ下の兄弟間で意見が分かれている
				どんなふうに過ごしたいか	意識が戻れば今後の望みを本人と日本在住の弟とは直接話ができる 意識が戻るかどうかは不確定であり延命治療に当たるとアメリカ在住の弟は考える アメリカ育ちの兄の希望はアメリカ在住の弟こそが代弁できると考える
				最期まで自分らしく生きるための医療	最期まで自分らしく生きるための医療 今のうちに入院療養すれば、大事にしたいこと、望む生活をかなえられる 入院中でもweb会議などを行える環境は可能である 急性膵壊死は元気な状態で、ある日突然やってくる 将来の望む生き方のために、今のうちに、今の目の前の望みは振り分ける話をしましょう
				最期まで自分らしく生きるための医療	脳ガンマナイフ治療（低侵襲放射線治療）により意識が戻る可能性はある ガンマナイフ治療はすぐには効果が出ないのでまずは人工呼吸が必要である 脳転移の進行が早く治癒は望めなく、医学的には終末期といってよい それなりのACPは存在していたが、病状によって変更もありえる 意識が戻る可能性がある治療を行う目的での人工呼吸は今のACPでは判断が困難 もし意識が戻れば本人を含めて、今の病態を踏まえた今後の話をしましょう

以下の事例は、コラムとして掲載する。

	概要	課題
終活をやったつもりになっている	◆70代 女性 ◆独居 ア. 近頃、心身の活力（筋力や認知機能など）が低下していくことに不安を感じ、エンディングノートを一人で作成し、家に保管した。 イ. 救急搬送された際に活用されないまま、本人の真意がわからないまま治療が行われた。	ア. 本人の真意が不明 イ. 考えたことについて話し合いや共有がされていない ウ. 実際に医療のことを決める際には、医療関係者から十分な説明を受けながら、一緒に考えていくことが必要

●そのほか、「新型コロナウイルス感染症とACP」、「身寄りのない一人暮らしのACP」について、コラムを掲載